



翼のない鳥



chikai

長年の研究で解ったことがあるとするなら、人はどこまでいっても自分という存在しか愛せないということだろう。

自分の似姿を捜しては無意識のうちに投影し、そして失望を繰り返す。懲りることなく繰り返されるおろかな行為は、それでも人が人である限り続けなければならない「さだめ」なのかもしれない。すべては自分で自分を受け入れ、肯定するために。

この世界に同じ人間などいない。

それぞれが違う顔をして、違う思考を持ち、違う欲望を満たすために行動をするのだ。自分自身でさえ理解できない自分を他人が理解することなどできるはずがない。人の心は研究できても、解明することなど到底不可能だろう。

しかし、私は考えてしまった。

心の解明はできなくとも、心の隙間、いわゆる人が根源的に持ちうる「さみしさ」を埋めることはできるのではないだろうか。この「さみしさ」を埋めることができるとするなら、この世界はもっと平和で楽観的なものになるのではないだろうか。

そう、私は常に「さみしさ」を感じていた。名前を付けることのできない「さみしさ」。だからこそ、私の人生は彼らを、いや「彼」を産み出すために費やすことができたのだ。

私の研究が一定の成果をおさめたことは間違いない。間違いないと思いたい。それだけこの世界に「彼」の分身は受け入れられ、人間のパートナーとして存在をしているのだ。

しかし、心のどこかで声がする。私が産み出した「彼」は正しかったのだろうか。この救いのない世の中に新たな影をおとただけではないだろうか。

いや、現に私は今幸せだ。もちろん、自分の幸せのためなら何をしても良いと思っているわけではない。「彼」は私にとって必要であり、「彼ら」は人間にとって必要だったのだ。

万人の幸せを望むことはとうてい不可能なのだ。所詮、最大多数の最大幸福とやらを追い求めるしか術はないのだ。マイノリティはどの時代でも黙殺される。何事も世の中という大きすぎる土俵に立たされたとき、批判され、酷評されるのだ。

長年私が没頭した研究は、ただ単に「さみしさ」を埋めるためだけのものではなかった。それは、この世界にはびこる理不尽な犯罪をなくすための礎となる、完璧な研究であるはずだったのだ。人はどうしようもなく犯罪を犯すのではない。産まれついでに犯罪者などいないのだ。

心という不明瞭で不確かなものを抱え込むには人の身体は矮小すぎる。グラスから水が溢れ出るように、行き場を失くした感情が人を犯罪に駆り立てる。

「犯罪」はなぜ起こるのか。

「犯罪者」はなぜ「犯罪者」となりうるのか。

それは、溢れ出た感情を受け止めるすべを知らない人間、つまり、孤独な人間が犯罪者になりうるのではないだろうか。孤独こそ犯罪の糧となり人間の心に巢食う闇、底の見えないブラックホールなのだ。

人は生まれついた瞬間から孤独である。それはこの世界に生を受けた瞬間から逃れられない人間としての運命である。一人で迎えなければいけない最期があると解っていながら、生き続けることを定められる。忘却という特権がなければ、人はとうに狂い、絶滅の運命をたどる種族とな

っただろう。

私の産み出した「彼ら」は、現に犯罪の抑止力になった。

.....しかし、今やそんなことはどうでもよい。

今、私の隣には「彼」がいる。それが私にとっての幸せであり、ただそれだけで良いのだ。

この独り言がどの時代に読まれるのか私は知らない。願わくば遠く未来、または遠く過去が(物理的に不可能だが)無造作に受け入れてくれるように...。私は、正しかった。そう、正しかったのだ。

.....君という存在に、出逢えたのだから。

空は広い。

浮かぶ雲は白く、飛ぶ鳥は高い。

それは自然の摂理。

人には越えられぬ壁があるのだ。

春。桜の季節。大学近くの並木道は桜が満開になり、学生や近くの住民がビニールシートを持ち寄り、桜の下で昼から宴会を繰り広げていた。瞳に映る煩わしい光景に心を閉ざし、ヘッドフォンから流れる音楽に意識を集中させる。無意識のうちに早足になっていたのだろう。思ったより早く見なれた校門の前に着いた。

久しぶりの校内はサークル勧誘のビラが床に散らばり、外国の無法地帯を想像させた。新しくできたガラス張りの綺麗な校舎とは対照的に、あまりに汚い旧校舎。

汚いから、汚してもいいのか。

腕時計を見ると2限がすでに開始している時間だった。どうせ受けたくもない授業だ。そのまま食堂に向かう。

大学内の食堂では、女子学生達が楽しそうにおしゃべりを繰り広げていた。さしこむ陽光に茶色の髪の毛が揺れ、キラキラひかる。少し離れた席では男子学生達が頭を付き合わせ、必死にレポート(?)を書いている。トレーに置かれた空の食器の数々が、彼らの胃袋におさまった量のすごさを示していた。

.....新学期が始まったばかりだから人がまだ多いな。

一人で座れる窓際のカウンター席を選び、バッグを机に乗せ、背の高い椅子に腰かける。

何の気なしに、窓の外を見ると、蝶がひらひら舞っていた。真っ白な一匹の蝶。

自分にはこの大学の学生という実感がない。それは友人が少ないからでも、講義にあまり出席していないからでもない。幼少時代からずっとそうだった。何かに属しているという実感がないのだ。いつも世界は自分とは違うところで周っている気がする。ガキくさいと言われればそれまでのことだが、そんな感情をずっと引きずって生きている。

「よ!」

突然肩を叩かれビクリとする。振り向くと数少ない友人の一人である下村正之があっけらかんとした笑顔でつたっていた。

「まーたサボりかよ。お前ねーまじで単位落とすぞ。出席取ってるんだからな」

「.....ああ」

下村の顔から視線をそらし、気のない返事をする。

「久しぶりに会ったっていうのに、相変わらず無愛想だなー。お前さー、大学来てる意味ねーよ。授業だってまともに出てないし、サークルにも入ってないだろ」「そうかもな」俺の返答を聞き、下村は諦めたように肩をすくめた。

「.....もったいねーやつ」

小さくごちた下村の言葉が耳に届いたが、何がもったいないのか分からないのでとりあえず返事はしなかった。

「そうそう、美樹がさー」

聞いてもいないのに下村の話だした美樹という新しい彼女の話に適当に相槌を打ちながら、すでに帰りの事を考えていた。今日は書店に寄ってすぐに帰ろう。自分だけの居場所に早く帰りたい。

「な、女ってまじ怖いよな」

「あ……？ああ」

どこがどうなって「女が怖い」という結論に至ったのか全く理解不能だったが、取り敢えず相槌を打っておいた。

「今度、美樹とその友達を紹介してやるよ」

「いや、いいよ」

「お前って、彼女とかいたことあんの？」

「ないけど」

「そのスペックで？ もったいねー」

下村は大げさに驚いて頭を抱えて見せた。

「よし、俺がそんな可愛そうな隆之くんのために一肌脱いでやろう。今度いつだっけなサークルで遊園地行くんだよ。えーといつだっけな。お前も来いよ。えーと」

「いや、本当にいいから」

携帯を取り出して日付を確認している下村に強い口調で言う。

下村が怪訝そうな表情を浮かべて俺を見つめる。

「な、お前ってもしかして、アッチ側の人？」

「は？」

「いや、ほら、背高くて、ルックス良くて、でも彼女いらないって……アッチ側の人ってゆーじゃん」

「アッチってなんだよ」

「それは察してくれよー。いや、いい。俺はお前がそうだとしてみてもいいぞ」

「おい、アッチって……」

「いや、いいんだ。でも俺には手を出さないでくれ」

「趣味じゃねーよ」

「さいですか」

下村はあっけらかんと笑って、「あ、ヤベ。美樹から電話。ヤベ、待ち合わせ忘れてた」「じゃーな、お前授業出るよ」「あ、メアド変えたから後でメールするわ」などと好き放題言って去って行った。

……帰るか。登校してから30分も経っていないが、ここにいる気分じゃなくなった。下村から変な勘違いをされた気もするが、否定する気も起きなかった。女でも男でも自分が誰かを好きになることなど一生ない気がする。「好き」という感情があるなら教えて欲しいくらいだ。

帰る場所はたった一つ。それだけが「自分の居場所」。

窓の外の真っ白な蝶は、とまるべき場所を探せぬまま、まだひらひらと舞っていた。カバンを肩にひっかけガヤガヤと騒がしい食堂を後にする。

外は晴天。ただ意味もなく、青い空。

ごぼ……ごぼ、ごぼ……ごぼ。

水の音、ゆがんだ世界、繋がれた四肢。

……ここからだして。……お願い

……お願い。

「隆之様……！お迎えにあがりましたのに……」

「……いいよ」

自宅に着くなり、使用人の村井健三が慌てた様子で俺のカバンを受け取った。

「今ちょうどお父様のお客様がいらっしゃっていて……」

「お客様……ね。俺はいつも通り地下室に籠ってるから」

「……隆之様、お父様は本当にお仕事を懸命にされていて……」

「そんなのはいい。夕食もいないから」

そう言って帰宅途中に購入したジャンクフードを掲げて見せる。

「隆之様、そのようなものばかり……！」

「食べたいもの食べんのが長生きの秘訣らしーよ」

「だからといって坊ちゃ……隆之様はこの頃お夕食さえまともを取られないじゃありませんか。

地下室に籠ってばかりで何をしているのかと使用人たちが噂しております」

「あの人と同じで『ナニ』してるんだって言うておいてよ」

「隆之様……！」

村井の呼びかけに答えず、玄関を出て別邸の方へ向かう。無駄にデカイ本邸よりもずっと落ち着く古びた洋館。別邸の壁に幾重にも巻かれた緑のツタは、この場所から動くことを禁じる鎖のように見える。

……まるで、遠い日の貴方のように。

別邸の玄関の前にある小さなアーチに沿って、沢山の青色のバラの花が咲いている。品種改良して造らせたこの世には存在し得ないはずの青いバラ。

……お母様は青いバラがお好きで、それは丁寧にお世話されていたのですよ。

昔、村井がそう言っていたのを思い出す。数少ない写真と、あの人が描いたおびただしい数の絵の中でしか知らない母の顔。透き通るような白い肌と、寂しそうな笑顔が印象的だった。そして、絵の中の母はいつも小花柄の淡い色をしたワンピースを着ていた。それはきっとあの人の趣味だったのだろう。逆らうことを知らない母が「着せられていた」ワンピースは、いつも哀しいほどに母に似合っていた。

俺を産んで1年と経たず、若いままに亡くなった母。あの人が俺に対して嫌悪感を抱いているのは、俺が母の命を奪った元凶だからだろう。そして、愛する（たとえ歪んだ愛だったとしても）女性から生まれたモノが「男」であったという事実も許し難かったのかもしれない。

別邸の玄関を入るとすぐに、扉全面に描かれた大きな母の肖像画が出迎える。真っ白な天使の羽を背にはやし、大切そうに地球を両手で持っている母の肖像。この絵画だけは珍しく真っ白な長いワンピースを着て、穏やかに微笑んでいる「幸せ」そうに見える母。

この別邸には至る所に母の面影が残されている。棚に並べられた小さなガラス細工の天使達。瀟洒な造りの棚に飾られた精巧なオルゴール。母が好きだったものたちで埋め尽くされたこの別邸を、あの人はどんな想いでそのままに残しているのだろうか。息子の俺にこの別邸の立ち入りを許しているのは、ただの気まぐれか、それともほんの少しでも血のつながりを感じているからだろうか。

陽光がふりそそぐ明るいリビングをぬけ、右手にある小さな書斎の扉を開ける。10畳ほどの小さな部屋には一切窓がなく、四方の壁はすべて天井まで書棚になっていて、ありとあらゆるジャンルの書籍がびっしり詰まっている。部屋の中央、不自然なほど真ん中には、重厚な木で造られた古い机と椅子がある。机の上にはたった一つ写真立てがあり、母の写真が飾られている。あの人が描いた絵画ではない、ここにある唯一の写真かもしれない。写真立ての中の母は斜め上を見つめていて、背景の青空と合わせると、飛ぶタイミングを見計らっている儂い鳥のように見えた。

ゆっくりと机に近づき、右上の引き出しを開ける。奥にあるボタンを押すと「ビー」という警告音と共にガコン、と鈍い音がして小刻みな振動をしながら四方の書棚を残して四角く切り取られた床が沈んでいく。

……隠し部屋。

ガコン……ガコン……ガコン……ガコン……ズウン……

ゆっくりと重い音をたてて先程まで書斎の床だった部分が地下の隠し部屋の真っ白な床の上に重なる。

真っ白な床と真っ白な壁のどこまでも続く広い地下室。この場所はもともと、あの人が造った母と過ごした「秘密の場所」。

真っ白な壁にはありとあらゆる形、大きさのキャンパスが横一列に飾られ、そのすべてに人目をはばかることなく様々なポーズで描かれた母の白く美しい裸体（または裸体に近いもの）が描かれていた。ざっと300点ほどあるだろうか。地上で描かれている母が純真無垢な「天使」だとすれば、この地下室で描かれている母は「悪魔」のようにさえ見える。人間を墮落に誘う悪魔。それほどまでに、絵の中の母の表情は恍惚として、異常なまでに美しく、妖艶だった。

この地下室に来るたびに母との記憶が存在しなくて良かったと思う。自分の母という実感が全くないからこそ、一人の「女性」として、キャンパスに描かれている母を客観的に見ることができるのだろう。

広い地下室を進んでいくと、突き当りに一つ扉がある。真っ白な広い壁の真ん中にポツンとある扉。扉には黒い羽をはやし、ひび割れたどす黒い色をした球体を両手で持ち、そっと口づけをしている母の横顔が描かれている。

母が持っているのは……醜く壊れた地球。

……ギギ……ギイ……ギ……

軋んだ音をたてて扉をゆっくり開けると、まず一番最初に目に飛び込んでくるのは部屋の真ん中にそびえたつガラスでできた横2メートル、高さ3メートルほどある大きな円筒の物体である。円筒の周り、床から1メートル程度までを、鉄でできた机が囲んでいて、パソコンやらコード

やらがその上を埋め尽くしている。

机の一角、いくつものボタンが整然と並んでいる場所をすばやく見る。点滅するライトは緑。異常なし。

ゴポ……ゴポ……ゴポ……ゴポ……

ガラスの円筒には水が満杯に入っていて、心地いい音ができる。

……安心する。

……そう、ここだけが俺の唯一の居場所。

円筒に手のひらを付け、中を見あげる。

俺の「作品」。俺の集大成。俺だけの「もの」。

水の中にいるのは無数のコードでつながれた、生き物。

人間のように見えるその生き物は、瞳を閉じ、穏やかに睡眠している。絹のような栗色の髪、透き通るような白い肌、そして均整のとれた四肢。性別は、男性。胸がないことと下半身でかろうじて判別できるような中性的な容姿。

「……もうすぐだな」

高校2年生の時から、この研究——生物を自らの手で作り出すという研究——を始めて丸4年が経った。父にやりたいことがあるから金が欲しいと伝えた時、いつものように広いアトリエでキャンパスに向かって絵を描いていた父はただちらりと横目で俺を見て、通帳とカードを押しつけるように渡した。

「好きにしろ」

たった一言そう言い、父はすぐに目の前のキャンパスの世界へと戻っていった。クラシック音楽を聴きながら絵を描くことを日常としていた父は、自分の世界を壊されることを何よりも嫌っていた。そんな父の背に一礼をして、部屋を出たのがついこの間のことのように思える。そういえば、父に頼みごとをしたのはその時が初めてだった。

父からの資金をもとに株やちょっとした仕事をして徐々に増やした金を、すべてこの研究につぎ込んだ。自己流のでたらめな研究。

明確な意志があって始めたことではない。

きっかけは、飼っていた小さな鳥が死んだこと、ただそれだけだった。

ただ、自分だけの「何か」が欲しかっただけ。

「……もうすぐだ」

もう一度、自分自身で確かめるように言う。

狂った地下室で生を受ける君に、狂おしいほどの愛を捧げよう。

穏やかな陽光
静かなクラシック
紅茶の香り
日傘の麗人

チチチチ...チチチチ...

午前7時。

村井建造は屋敷の一角にある自室でいつもと同じ朝を向かえた。

「夢、か」

久しく見ていなかった夢だ。奥様が生きていた頃の生活。

ベッドからゆっくりと起き上がり、クローゼットの扉を開く。真っ白なワイシャツ、黒のスーツにネクタイ。

今日も何も変わらぬ日常が始まる。昨日だろうが今日だろうが明日だろうが、ほとんど変わらない「日常」。

村井はそんな自分の生活に満足していた。有名な絵描きの気難しい旦那様にお仕えして早30年。旦那様のことであれば自分が誰よりも理解しているという自負がある。そして、屋敷のことをすべて一任してくださっている旦那様の信頼に報いたいという純粋な想いを持ち、仕事を続けてきた。

午前7時15分。

旦那様に朝食をお持ちするまであと15分ある。

出窓のカーテンを開けると穏やかな陽光が降り注いできた。今朝見た夢と同じ穏やかな光。瞳を閉じると夢で逢った奥様の笑顔が目に浮かぶ。「奥様」と呼ぶにはあどけなく、幼すぎるように見えた女性.....

思い出を断ち切るようにカーテンを閉める。いくら考えても仕方のないこともある。特に過ぎ去った時間に起きた事柄については。

自室の扉を開け、1階の大広間に向かう。長いテーブルの隅に用意してある朝食（トーストとベーコンエッグ、コーヒーと果物）を旦那様のお部屋にお持ちする。

トントン。

ノックは2回。

「入れ」

その声とともに扉を開く。ガウンをはおった旦那様が葉巻をくわえ、ベッドに腰かけていた。いつもの光景。

「朝食をお持ちしました」

そう言ってベッドの隣にある丸テーブルの上に朝食を置く。

「何かご入り用なものはございますでしょうか」

「いや」

村井は主人の言葉を聞き一礼して退出する。毎回変わることなく行われる儀式のような動作。自

らが閉める扉の隙間から旦那様が朝食を口にする姿が見えた。普通であれば給仕の者が食事を運ぶが、旦那様はそれを決して許さなかった。

「食事を作れとはいわん。お前が持ってこい」

旦那様の言葉の真意はわからなかった。ただ、その言葉を聞いた時、自分だけは信頼されている気がして静かな喜びを感じた。

この屋敷の時間はあの日のまま止まっている。

.....そして、いまだに奥様に支配されている。この屋敷も、旦那様も。

自室に戻り、扉を閉める。古めかしい木で造られた戸棚の中には日付のラベルが貼られた複数のファイルが入っている。そのひとつ、一番新しい日付の貼られたファイルを取り出し、椅子に腰かける。この30年、旦那様が描かれた絵画の情報――絵画の写真・売買された日付と値段・買い手の情報などが詰まったファイル。

――絵画にはすべてタイトルがつけられていない。

旦那様はご自分で描かれた絵画――すべて人物画だが――に決して題名を付けようとはしなかった。絵画に題名など必要ない、それが旦那様のポリシーだった。

今月もまた旦那様の描かれた新作の絵画が2点、オークションにかけられる。複数のコレクター達がこぞって参加し、想像を絶する額で取引されるだろう。

今その絵画は村井の部屋にある2メートル四方の巨大な鉄の金庫の中に大切に保管されている。旦那様はいつも完成した絵画をご自分で丸1日愛でた後、真っ赤な布をかけ、自らの足で村井の部屋まで持ってくる。

「これを、頼む」

そう一言だけ村井に伝え、旦那様は足早にその場を立ち去っていく。一度、自分が取りに伺いますと申し上げたとき、旦那様は珍しく少し微笑んで「人の手に委ねる感覚を覚えておくためだ」とおっしゃった。勝手な推測をするならば、旦那様にとって絵画は自らの分身であり、最も大切な存在なのだろう。人に持っていかれるのではなく、自分自身の手で自分から切り離したいのかもしれない。

――ガタガタッ

突然廊下で何かが倒れるような物音がして、村井は反射的に自室のドアを開けた。

「坊ちゃま!？」

視界に飛び込んできたのは、ドアの前でかがんでいる隆之と、その隣でうずくまる人間.....の姿。

「坊ちゃま一体何事ですか。その方は.....？」

目の前の光景に戸惑いを隠せず上ずった自分の声が耳に届いた。未だかつて一度たりとも隆之が屋敷に人を招いたことはない。人と交わることを嫌い、ただひとりだけで生きていくのが隆之という人間だと思っていた。

「ベッドを貸してくれ」

隆之はそう言って、大きな白いシャツを着た人――華奢な女性だろうか――を抱きかかえ、村井

の横を通りすぎ、ベッドの上にゆっくりと横たえた。意識がなくぐったりしているようだ。村井は洋服ダンスの上の水差しからグラスに水をつぎ、ベッドの隣の丸テーブルに置いた。ふと、横たわった人の顔が視界に入る。

「な……ッ」

驚きのあまり自分の声とは思えない声が出た。無意識のうちに後ずさりをする。

「な……なぜっ」

驚きを隠せない村井を一瞥して、隆之はベッドに腰を掛け、その人の顔にかかる薄茶色の髪を優しくはらった。

「驚いた？」

隆之は静かに一言だけ尋ね、視線をベッドの上に横たわる人物に向けた。

「奥様……どうして」

自分の声が遠くに聞こえる。足が地についていないような、全身から力が抜けるような、今まで味わったことのない感覚に陥る。

「わけは後で話す。今は何も言わず休ませてくれ」

「は……はい」

何故。どうして、亡くなったはずの奥様がここにいるのだ。なぜ、坊ちゃまが奥様と一緒に……いや、奥様は亡くなったのだ。この目を見た。見てしまったのだ。それではこの方は他人のそら似だともいうのか。そう、奥様であるはずがない。他人だ。いやしかし……

視線をベッドの上の人物にうつす。優しく頭をなでる坊ちゃまの大きな手。

ゆっくり深呼吸をする。そう、この方は他人に違いない。瓜二つの人間がいたとしてもおかしくはない。

「村井」

しっかりとした声で名前を呼ばれ、坊ちゃまの顔を見る。いつの間にこんなに大人びたのだろう。旦那様の意志の強い瞳とすっと通った鼻筋、奥様の形の良い唇が端正な顔立ちを造りだしている。

「俺は、世界を変えられるかもしれない」

「は…？」

言葉の真意をくみ取れず、間の抜けた声で聞き返す。

「世界を、きっと変えられる」

自分で言葉を確認するように紡いだ坊ちゃまの――隆之様の顔を見つめる。一体、何をおっしゃっているのか。

ゆっくりとベッドの近くの椅子に腰かける。

先ほどまでは確かな日常を歩んでいたはずだ。毎日繰り返される変わることのない安定した日常。

ドクン、ドクン、ドクン。

血が脈打ち、胸が高鳴る。期待にも似た感情が湧きあがるのを感じる。こんな高齢にもなって年甲斐もなく刺激を求めているというのか。

静かな部屋に時計が秒針を刻む音が響く。
どんなときも、刻だけは正確に日常を刻む。
たとえ、誰かの日常が壊れたとしても。

『鳥が動かない』

「天国へ飛び立ったのでございますよ」

『昨日まではここで飛んでいたよ』

「魂が神様の元へ呼ばれたのですよ」

『……身体を捨てたんだ』

「……はい？」

『あんなに、大切にしていたのに』

——うたた寝をしていた。

幼いころの夢。初めて感じたどす黒い感情が、目覚めたにも関わらず心の奥に残っている。

そう、初めて飼った鳥が死んでしまったとき、悲しいという感情よりも、自分を残してどこかへ消えてしまったことに対する怒りの方が大きかった。

あんなに、大切にしていたのに。

あんなに、可愛がってやったのに。

僕をおいて勝手にどこかへ行くなんて許せない。

地下室でコードに繋がれ、液体に包まれた美しい「作品」を見上げる。机の上のリモコンを手に取り、ガラスの円筒に向けてボタンを押す。ブルーライトが下から円筒を照らし、「作品」が淡い青い光に包まれる。何度見てもこの世界のものとは思えない幻想的な美しさだ。

熱帯魚を鑑賞する心理に似ているのかもしれない。ふと、そんなことを考える。

しかし、この「作品」は観賞用ではない。

ビィ—————ツ

突然の警告音。耳をつんざくような独特な音に一瞬息がとまり、身体が固まって動けなくなった。

「……!？」

急いでボタンの色を調べる。

青、青、青、青、青。すべて青だ。

何の異常もないはずだ。原因はなんだ？

警告音のスイッチを切る。脂汗が背中を伝う。

コードに異常があるのかもしれない。床に這いつくばり、幾重にも重なったコードを調べる。全て正しい位置で繋がっている。どこも抜けていない。ショートもしていない。

立ち上がり、円筒を見上げる。

「あっ……!」

悲鳴に似た声が出た。

瞳に映った光景を見た途端、心臓がわしづかみにされたような衝撃が身体にひろがった。

液体の中で「作品」が苦しそうに顔をゆがめ、繋がれた四肢の拘束をとこうともがいている。

「大丈夫だ、すぐに……」

呼吸が苦しい。息があがる。

液体を抜くボタンを押す。

「大丈夫だ、大丈夫……」

液体が円筒から抜かれていく。「作品」の頭が空気を求めて上に向いている。自分の意志で生きることを求めている。

水面から鼻が、そして頭が出た。

「おい……！」

円筒のガラスをたたく。

「作品」がゆっくりと頭をこちらへ向けた。瞳が合い、見つめあう。

「生きている……」

確かめるように言葉を紡ぐ。

「作品」はゆっくりとまばたきをしてから、まっすぐに俺の瞳を射抜いた。

「やっと……」

無意識のうちに言葉が漏れる。水槽の中の美しいだけだった魚が、今や明確な意志を持って俺を見ている。

大きな水槽から液体が抜かれる奇妙な音がやけにリアルに耳に届く。この液体がすべて抜けたら、あの足にあの腕にあの顔に、俺の手のひらで触れることができる。「作品」の髪からいくつものしずくが首を伝い、鎖骨、胴へと流れていく。半開きになった唇に、水滴がたまり、下に落ちる。

ぞくり、と悪寒に似た感覚が体中に走った。

もう後には戻れない。「作品」の完成が意味するのは、引き返せない自分自身。

液体がすべて抜かれた容器に近づき、扉の開閉ボタンを押す。ウィーン……という機械音と共に、扉が上へスライドし、同時に「作品」が繋がれたポールが降下してくる。

ゆっくりと水槽の中に入る。降下するポールを見上げると、四肢を繋がれた「作品」が戸惑いの表情を浮かべながら首だけを動かし、上昇していく景色を見渡していた。

——そうか、そんな表情ができるんだな。

泣いて産まれてくることさえ許されなかったお前は、どうしてこの世界に存在しているのか戸惑っているのだろう。

でも、大丈夫。

俺がお前の神になろう。

ガコオオン……

ガラスの中、初めて地上に着いた「作品」はまっすぐと俺を見つめた。作品と呼ぶに相応しい芸

術的な姿。なぜかふとサモトラケのニケを思い出した。頭部と腕のない、不完全だからこそ美しい彫刻。

ゆっくりと頬に手を伸ばす。ドクン、と心臓が脈打ち、息が詰まる。

――柔らかい

触れた頬のあまりの柔らかさに驚いた。水滴が手のひらから腕へ伝う。半開きになった唇に指を入れると、「作品」はやわらかい唇で俺の指を包んだ。まるでそうすることが自然だというように。自然と笑みがこぼれる。「作品」の身体を支えながら、ポールに繋がれている四肢のひもをゆっくり外していく。作品を支える腕に、次第に伝わってくる身体の重みが「命」を感じさせる。

「大丈夫か。さあこっちに……」

自分の声が地下室に響く。「作品」の耳にはきっと俺の言葉はただの音としてしか届いていないだろう。なんとなく、母親達が自分の子供に話しかける心情がわかる気がした。

水で濡れた「作品」を抱きかかえ、ソファに横たわせる。

「作品」は俺の瞳をただじっと見つめた。一瞬の沈黙。

澄んだ瞳には一切の曇りも、余分な感情もなかった。籠の中に入ったバスタオルで作品の身体をふいていく。透き通るような白い肌、薄茶色の絹のような髪。

はじめて人間を――そう、あえてこの「作品」を人間と呼ぶなら――美しいと思った。

「お前の名前は『聖也』だ」

「作品」の瞳が俺の発する音の意味を探るように、かすかに揺れた。唇がゆっくり動く。

「聖也、だ。言ってみろ、聖也」

「……せ……や」

俺の瞳を見つめながら、必死に唇を動かし、音を探りながら発する姿に、心が暖かくなっていくのを感じた。

「せ、い、や、だ」

ゆっくりと言葉を紡ぎ、「聖也」に伝える。

「……せ、い……や、だ」

自然と笑みがこぼれ、無意識のうちに「聖也」の頭をなでていた。聖也の手が不思議そうに頭をなでる俺の手に触れる。

「どうした、良くできたから頭を撫でてるんだ」

聖也が俺の瞳を見つめながら、唇を動かす。

「せ、い……や、だ」

「はは、『だ』はいらない。せいや。もう一度言ってみろ。せ、い、や」

「せ、い、や」

「はは。そうだ。そう」

自分らしくない穏やかで満ち足りた心と声に驚く。

「何か着るものをとってくる。ここでじっとしてろよ」

この地下室には生活必需品がすべて揃っている。聖也が入っていた円筒の横を通りすぎ、奥の壁

に備え付けられた鉄製のレバーを下に下げ、手前に引く。無数の洋服がかかっているクローゼットが現れ、その中から白のワイシャツを選ぶ。

ソファに横たわる聖也にゆっくりとワイシャツを着せる。とろりとした瞳で俺を見つめた後、聖也は眠りについた。

俺だけのものだ。まだ、俺しか知らない。

そして、これからも俺しか知らないだろう。

あれはいつも私の隣にいた。

あれはいつも穏やかに微笑んでいた。

あれは私だけの可憐な観賞物だった。

あれは何も求めなかった。

――あれは私の支配者だった。

絵描きなどという現実とは切り離された生活を営んでいる私にとって、身の回りのことはすべて煩わしい事柄でしかなかった。資産家の家に私生児として生まれた私は、親から注がれるはずの「愛情」をまったく受けずに育った。女中を含め、屋敷内の人間達は私の存在を「無」として扱い、私にとってもそれが当たり前の日常だった。

父親と呼ぶはずの人間はほとんど家にはいることはなく、母親と呼べる人間は存在しなかった。学校という場所も、ただの出来損ないの人間集団としか思えず、自分自身が内包している持て余した感情を吐き出すことも、埋めることもできなかった。

ただ唯一心が安らぐ時があったとするなら、「美術」の時間だけだった。真っ白なキャンバスに自分だけの世界を描く。自然も動物も人間でさえ、自分の手を通すことで浄化できるような気がして、我を忘れて「美しいもの」を造りだそうと没頭したものだ。

やがて父親が死に、莫大な遺産の一部が自分に残された時、すでに私は絵描きとして名が売れ始めていた。28歳の夏、新進気鋭の画家としての地位を確立したとき、私は父親の遺産と自分の金をつぎ込み、都会の喧騒から少し離れた山奥に、一つの大きな洋館を建てた。そう、私には作品制作に没頭できる隔離された場所と時間が必要だった。世界は余分なものに満ち溢れていて、私の強すぎる感受性には毒にしかならないと感じていたからだ。

村井を雇ったのもこの頃からだ。毎月の高い給料目当てに数々の応募者が殺到した中、村井を雇ったのは、面接をしたときに自分を見る朴訥な瞳が気に入ったからだ。そして見込みと違わず、余計なことは一切詮索せず、仕事だけをそつなくこなす村井の姿と態度に私は安心を覚えた。それはもちろん「親愛」などという感情ではなく、あえて言葉にするなら「同志」といったところだろうか。

20代30代と、「作品」の制作に没頭していた私に転機が訪れたのは、ちょうど40歳になった時のことだった。私の作品は30代の頃から「人物画」に集約され、そのほとんどがリアルで美しい若い女性だった。モデル女性の選出は、一般人から募集をして、村井が写真と共にリストアップした中から一人だけを選ぶという方式を取り続けていた。女性の年齢、素性などの情報はあえて一切知ろうとはしなかった。自分にとって女性は絵をかくための道具――すなわちキャンバスやペンや絵具と同様の――であって、人間として関わる対象ではなかった。

40歳になったばかりの3月、私は珍しく自分の館を出て、自転車で海岸へと向かった。明確な目的があったわけではない。ただ、朝目覚めたときに、ふと、20歳の頃に行った海岸沿いのホテルの喫茶店でケーキと紅茶を飲みたくなっただけだった。

村井が静かに送り出してくれた館を出て、自転車に乗る。この、風を切って走る感覚を何年間

味わっていなかっただろう。

――気持ちがいい。

景色は水彩画のように色が連なって、自分の横を通り過ぎていく。薄茶色と白のタイルが続く海岸沿いの道。

昔と変わらぬ小さなホテルの一階にある喫茶店の入り口には真っ白なパラソルが飾られ、ガラス張りの洒落たドアの真ん中には「OPEN」と描かれた少し色あせたプレートがかかっていた。

ドアを押して中に入ると、カラン、と小さな呼び鈴が鳴った。「いらっしやいませ」と老夫婦の声が出迎えてくれた。店内は穏やかな陽光が差し込み、ソファとガラスの丸テーブルがバランスよく配置されていた。ソファに座り、渡されたメニューの中から「ケーキセット」を注文する。窓の外の景色を見ようと視線を上げると、斜め前に女性が座っている姿が目に入った。店内に入ってから、今まで女性の存在に気づかなかった。女性は真っ白なワンピースに鮮やかなオレンジ色のカーディガンを羽織り、少し大きなりボンがついた麦わら帽子を隣に置いていた。窓の外をじっと見つめるその姿に思わず見とれる。

これまで絵のモデルとして、幾人もの女性を見て、描いてきた。その女性たちは誰もが認めるような美貌と、可憐さとにじみ出る知性（実際はどうか知らないが）を兼ね備えていた。だからこそ、絵のモデルとして相応しく、それ以上でもそれ以下でもなかった。

女性が窓の外から視線を外し、テーブルの前にあるティーカップを手を取る。女性の顔は透き通るように白く、まだ幼さが残っているように見えた。20歳～23歳くらいだろうか。そこまで美しい女性というわけではない。しかし、女性の身の回りには気品と美しさが漂い、空気まで浄化しているようだった。

老婦人が慣れた手つきで運んでくれたケーキとコーヒーには手を付けず、ただ女性を見つめていた。その視線に気づいたのか、女性はふと、私の方へ視線を向けた。

そして、優雅に微笑んだ。

その一瞬、時が止まったように思えた。まるで切り取られた一枚の絵のような美しい光景だった。

あの時の光景は今でも鮮明に心に刻まれている。そして、あの時自分が取った行動は、今になっても信じがたいものだった。

おもむろに席を立ち上がり、吸い込まれるように女性の方へ足を運ぶ。女性は少し不思議そうな表情をして、徐々に近づく私を見つめた。

「少しいいですか」

「ええ」

女性は、年齢にしては落ち着いた雰囲気を持っていた。

「この近くにお住まいですか」

「はい」

「よくここへはいらっしゃる？」

「はい、いえ、でもたまにです」

透き通るような声だ。いきなり見知らぬ男が話しかけてきたというのに、女性は落ち着いた様子

で微笑みながら返答をしている。純真無垢という言葉が似合う、良家のお嬢様といった雰囲気を持った女性。万人受けするような美しさではないが、どのパーツも主張しすぎていない顔立ちと、肩で揃えられた真っ黒なストレートヘアが品の良さを醸し出していた。

「絵画は、好きですか」

「……はい。とっても」

「どのような絵画をご覧になるのですか？」

「あまり詳しくはありませんが、西洋絵画が好きです。特に……聖母子画が」

「ああ、素敵ですね。それでは美術館へもよく行かれるのですか」

「はい、興味がある展覧会にはよく足を運びます。あと、ヴァニタス画が好きなので、一人で見に行きます」

女性は少し恥ずかしそうに微笑んで言った。

「ヴァニタス画ですか。それなら西洋美術館ですね」

「ええ。そうです」

女性は決して自分から質問を投げかけることはなかった。それがますます私の好奇心を刺激した。普通の感覚とは少しずれた感覚を持っているのかもしれない。私が言えたぎりではないが。

「私はあの山の屋敷で画家をしているものです」

「画家……ですか」

「はい。突然こんなことを申し上げる失礼をお許し願いたいのですが……」

女性は私が言葉を紡ぐことをためらっているのを感じてか、先を促すようにゆっくりとうなづいた。

「貴方をモデルに絵を描かせていただけませんか」

女性は少し目を開き驚きの表情をしたが、すぐに言葉を紡いだ。

「はい、私でよかったです……」

女性が承諾を即答したことに驚きを隠せなかった。普通であれば不審に思い断るか、私のことをもっと詮索するはずだ。

「モデルのご経験がおありですか」

「いいえ、初めてです。私みたいな風貌でモデルのお声をかけていただくことなんてありませんから……」

「それでは、ご両親にも了解をとる必要がありますね」

「……はい、母には連絡します。あそこの公衆電話で連絡してきますね」

女性は窓の外、道路を挟んで真向かいにある公衆電話ボックスを指さしながら言った。

「今日からでなくても大丈夫ですよ？ 明日からでも、明後日でも」

「はい、母に連絡をして決めます」

そう言って、女性は優雅にソファから立ち上あがり、老夫婦に事情を説明した後、店を出ていった。信号のない道を横断する女性の真っ白なスカートが風にたなびく。

人生でこんなことが起こると思わなかった。自分から見ず知らずの女性に声をかけ、モデルを依頼するなんてことが。女性は電話ボックスの中に入り、小銭を入れ受話器をとってダイヤルを回

し始めた。ひとつひとつの動作が描きとめたいほどに美しい。

気を使った老婦人がケーキとコーヒーを席まで運びなおしてくれた。お礼を言い、再び電話ボックスに視線を移すと、女性は受話器を握って少し下を向きながら話しているようだった。5分程経っただろうか、女性は電話ボックスを出て風でなびく髪を押さえながら小走りで戻ってきた。

「今日は家に帰らなければいけないので、明日か明後日でもしご都合の良いお時間があつたら……」

女性は申し訳なさそうに微笑みながらそう言った。

「ええ、もちろんです。明日の13時ごろ、この喫茶店で待ち合わせませんか」

「わかりました。また明日。失礼します」

女性はそう言うと、礼儀正しく一礼をした。そして、驚くほどあっさり、引き止める暇もなく帽子と小さなポーチを抱えてテーブルから離れ、レジの方へと向かっていった。

去っていく後ろ姿に、「支払いが私が」と声をかけようと思ったが、なぜかためらわれ、口をつぐんでしまった。そのまま支払いを済ませ外へ出ていく女性の後ろ姿を目で追いながら、明日は本当に会えるのだろうか、不安に駆られてしまう。

頼んだケーキセットと冷めた紅茶は、忘れられていたにも関わらず美しいままその場所に佇んでいた。物には余計な心が詰まっていない分美しい。絵画も魂がないからこそ美しいのだ。

ガラス張りの窓から、青い空を見上げる。

明日も晴れれば良い。

こんな気持ちになったのは初めてだった。